

## 日韓発掘調査交流に参加して

大韓民国慶州国立文化財研究所との間にかわされた日韓発掘調査交流の一環として、約1ヶ月間奈良文化財研究所に滞在された李柱憲先生と俞洪植先生から研究交流に参加した感想をいただきました。

2008年1月21日午前9時50分、寒い冬の真っただ中、大きな轟音を響かせて釜山空港を発った飛行機は、いつのまにか関西国際空港に到着した。空港から都城発掘調査部飛鳥・藤原地区へ向かう途中、車窓から雪に覆われた生駒山地と二上山を見ることができた。その風景は非常に印象的で、私がよく目にする韓国の雪景色とはどこか違う印象を受けた。

研修では、発掘調査（甘樺丘東麓遺跡、平城宮東方官衙）への参加、遺跡見学・資料調査（吉野ヶ里遺跡、九州国立博物館など）をおこなった。

滞在期間中、最も印象深かったのは高松塚古墳シンポジウムへの参加である。高松塚古墳シンポジウムは、2年間にわたる高松塚古墳石室解体調査の報告会で、石室解体過程と、発掘以後の古墳と壁画の状態、そして今後の壁画の保存方針と遺跡整備計画について報告がなされた。そこは直接作業を遂行した関係機関の責任者たちが、古墳の解体と復元の必要性を一般市民に説明し、理解を高める場であった。800人を越える市民たちが報告会のために集まり、高松塚古墳の未来を思いつつ真摯に聞き入っていた様子は、まだ私の脳裏に鮮やかに残っている。特に、この日の行事は1949年法隆寺金堂の火事を契機に制定された文化財防火デーにおこなわれたもので、文化財に対する日本人の幅広い眼鏡を直接感じることができる機会でもあり、いっそう意味深く感じた。

（国立慶州文化財研究所 李柱憲）



平城第429次調査現場にて（中央が李柱憲先生）

韓日発掘調査交流協約に基づいて、2008年2月11日から4週間、奈良文化財研究所に滞在した。滞在期間中、甘樺丘東麓遺跡と平城宮東方官衙の発掘現場に参加する機会を得た。また、飛鳥時代と奈良時代の寺院の踏査、平城宮第一次大極殿復原現場の見学をおこなうことができた。

第一次大極殿の復原は文化庁主管で推進されており、平城遷都1300年にあたる2010年完工を目指してピッチをあげていた。私が復原現場を見学した2月20日には、全体的な骨格の組立は大部分仕上がっていて、もっぱら上層屋根の瓦を葺いているところであった。

第一次大極殿の基壇部には最先端の科学が適用されていた。基壇の内部には、水平・垂直振動はもちろん、不規則振動までも耐えることができる耐震基礎が設置されていた。このような特殊基礎によって建物の安定性が確保され、復原された大極殿は今後1000年以上耐久するとの説明を受けたが、その自負心を充分に理解することができた。

復原現場付近の製図室では、部材の組み上げた状態を実物大で作図した設計図を随時検証しており、実際に、組立工事をする前に必ず図上復原をおこなうと聞いた。少しの誤差も認めないという匠の心意気をうかがうことができた。

第一次大極殿復原現場を見学しながら、私が日本に到着した日に焼失したソウルの崇礼門（南大門）を思い出した。あっけなく焼失してしまったが、第一次大極殿復原事例などを模範として、充分な時間をかけて復原を推進すれば、崇礼門の原形を完璧に再現できると期待している。

（国立慶州文化財研究所 俞洪植）

（日本語訳：都城発掘調査部 中川あや）



平城宮第一次大極殿復原現場にて（右が俞洪植先生）